

主 題：喜んで与える人へと成長する②

聖書箇所：Ⅱコリント9：8－12

テーマ：喜んで与える者としてますます成長していく

今朝、皆さんとともに学んでいきたいことは、先週に引き続き喜んで与える人へと成長するということです。

●ハドソン・テイラーの葛藤

内容に入っていく前に、まずある人物のあかしを見たいと思います。その人物とはハドソン・テイラーです。ご存じの方も多いかと思いますが、彼は19世紀中国で活躍したイギリスの宣教師でした。テイラーはその生涯にあって、福音宣教に熱心に励み、彼が始めた宣教団体は800人以上の宣教師を送り出しただけでなく、少なく見積もっても2万人近い人々をキリストの信仰へ導いたとされています。この人物はすばらしい信仰者でした。これから読むのは、そんなテイラーが信仰を持ってまだ浅かった19歳のころ、彼に起こった一つの出来事です。この場面を簡単に説明すると、彼のもとにひとりの男性が助けを求めて訪ねて来ます。その男性は貧しくて、彼の家族も妻は死にかけ、子どもたちも飢えに苦しんでいるという悲惨な状態にありました。そんな彼との出会いの中で、テイラーの葛藤する姿がこのように描かれています。「腹ぺこだ！ハドソンはイライラしながら、ポケットの中の銀貨を手探っていた。住居に置いてある二杯のかゆをほかにしたら、それが彼の持っている全財産であった。他に食物もお金もなかった。辛うじて考え得ることは、その一枚きりの銀貨を男に分け与えてやることであった。そう思いつくと、急に、意味もなくこの男の存在が煩わしくなり、こんな事態になるまで放っていたことで男を責めた。なぜ、援助を求めていかなかったのか。死にかかっている妻と、その子どもたち、それに対して何もなされていないとは何ということだ。『私は(司祭の元)に行ってみました。けれども、あの人たちは明日の朝十一時に直出してくるよと言ったのです。でも、妻は朝を待たずにいくのではないかと心配しているのです。』と男は暗い顔で言った。この言葉にハドソンは非常に同情した。彼自身の状態もはなはだ心もとないものではあったが、この男の窮状にくらべたらはるかに裕福に思えた。もし二枚の銀貨があったなら、喜んでその一枚を出したであろうに……」と。

これが、後にすばらしい働きをすることになるハドソン・テイラーが抱いた葛藤でした。これには続きがあって、その続きは最後に見ます。でも、どんな信仰者にとっても、惜しみなく与えるということは時に難しさが伴うのです。私たちも同じです。ある時は喜んで惜しみなくささげようという気持ちでいっぱいになっていても、次の瞬間、自分の必要が満たされていないことにふと気づいたなら、不安や恐れを抱いてささげることがためらってしまうかもしれません。自分の置かれている状況に満足や希望を見出すことができなければ、だれかに喜んで与えることよりも、自分が受けることに心が支配されてしまうことがあります。私たちはそんな弱さを抱えていたりするのです。だからこそ、喜んで与える人へとますます成長していくために、私たちはみことばのうちに励ましと力を見出す必要がありました。そして、その助けをコリントの教会に対するパウロのことばから見て取ることができたのです。

○喜んで与える人へと成長する：六つの動機

前回から、私たちはⅡコリント9：6－15を通して、喜んで与える人へと成長するために覚えるべき六つの動機を見始め、すでに二つを学びました。一つ目の動機として教えられていたのは、喜んで与える人は神様からの祝福を期待できるということでした。惜しみなく種を蒔く者には神様が惜し

みなく報いてくださると信頼することができたのです。主のために豊かに喜んでささげるささげ物は決してむだにはならず、必ず主が報いてくださるという揺るがぬ期待、これが私たちが一つ目に覚えるべき動機でした。また、二つ目の動機として教えられていたのは、喜んで与える人は神様に喜ばれるということでした。神様は何をどれだけ与えたのかという量ではなく、どんな心でそれらをささげたのかを問われるお方でした。だからこそ、ひとりひとりがいやいやながらでなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりに与えることが大切だったのです。そして、そのようにして惜しみなく、喜んで、みずから進んで与える人を神様も喜んでくださるという真理、これが二つ目に私たちが覚えるべき動機でした。どちらも非常に重要な真理でした。でも、これですべてが終わったわけではありませんでした。パウロは与えることについて、あと四つ大切なことを教えてくれています。なので続けてみことばと一緒に見ていきましょう。きょうは三つ目と四つ目の動機を8-12節で学んでいきます。その前に、いつものように6-15節のみことばをお読みします。

Ⅱコリント9：6-15

「:6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。:7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。:8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。:9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりにです。:10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。:11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。:12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。:13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。:14 また彼らは、あなたがたのために祈る時、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。:15 ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

3. 喜んで与える人は神様の恵みに確信を置くことができる 8-10節

さて、三つ目の動機は、喜んで与える人は神様の恵みに確信を置くことができるということです。そのことが8-10節に記されておりました。まず8節を見てください。「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」とパウロは述べています。ここでこれまでのパウロとコリントの教会とのやり取りを思い出してみてください。パウロはコリントの兄弟姉妹に対して、喜んで献金を用意してくださいとお願いしていました。自分たちが当初から約束していたとおりに、エルサレムの兄弟姉妹を思うその熱意をもって、いやいやながらでもなく、強いられてでもなく、豊かに惜しみなくささげるようにと励ましていました。そのようにしてみずから進んで喜んで与える人を神様も愛してくださるのだと。パウロは与えることに関して、6-7節ではっきりとした基準を示していました。

では、この教えを耳にしたコリントの人々の姿を思い浮かべてみてください。彼らはパウロのことばを聞いて、一体どんなことを考えていたでしょう？彼らの心のうちをいろいろな思いが巡っていたことは容易に想像できます。パウロさん、あなたはひとりひとりが犠牲的にささげることが喜ばれることだと言いました。惜しみなく豊かに蒔く時に、神様が豊かに報いてくださる、そんなすばらしい祝福を期待できるということも聞きました。喜んで与えることは、確かに私たちにとって非常に重要なことです。でも、もし私たちが惜しみなく与えることで、自分たちの生活が乏しくなったらどうするのですか、今持てるお金を喜んでささげたとして、逆に自分たち自身が貧しくなったらどうするの

ですか、豊かに与える人にはなりたいけれども、自分自身や家族の必要を満たすことができなくなったらどうするのですかと。こういった恐れや不安、疑いといったものが彼らのうちに生じていたとしてもおかしくなかったのです。またもっと言えば、先週のみことばを学んでいる中で、私たち自身も同じことを思ったかもしれません。惜しみなく、みずから進んでささげることの大切さを聖書が教えていることはもちろんわかる、それはこれまでも聞いてきたし、それが大切なのもよく知っている。しかし、こうして喜んで与える人へと成長する時に、私たちのうちに将来に対する心配や不安などが広まってしまえば、次第に心から喜びが失われ、惜しみなくささげることにためらいを覚えてしまうことがあります。神様や人に喜んで与えることを躊躇したり、自分の物は自分の物として手元に置いておきたいという思いに心が囚われてしまう、私たちはみな生まれながらにそんな弱さを持っているのです。

パウロはそんな弱さや難しさを人々が覚えるであろうことをよくわかっていました。だからこそ、そのような人々の疑問や懸念に対して8節で答えを与えるのです。残念ながら皆さんの持っている聖書の訳では少しわかりにくいかもしれません。でも、8節の原文は「神は、あなたがたをあらゆる恵みであふれんばかりにすることができる……」ということばで始まっています。パウロはさまざまな思いを抱いているであろうコリントの兄弟姉妹に向かって、あなたがたはいろいろな不安や恐れを抱いて、惜しみなく与えることに今ためらいを覚えているかもしれない、結果が見えないことで心配になっているかもしれないけれども、神様はあなたがたを恵みであふれんばかりにすることができるお方なのだというのです。この神様にはできるという真理、これは私たちの歩みにとっても大きな支えとなるものです。これこそが喜んで与える人へと変わることを動機づけてくれるものです。神様には私たちの必要をいつもすべて満たすことのできる、そんな力があるのです。

◎神様の偉大な力

思い返してみてください。私たちがみことばを見る時に、みことばは神様の力の偉大さを繰り返し教えていました。例えば、アブラハムとサラもそうでした。歳を重ねて老人になったアブラハムに対して、来年の今ごろあなたの妻には男の子ができていると約束がなされた時、サラは心の中で笑いました。老いぼれた自分には子どもなど絶対にできないと思ったのです。しかし、それに対して主は創世記18：13－14で「：13 ……「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言って笑うのか。：14 【主】に不可能なことがあるか。」と言われました。その後どうなったかは皆さんよくご存じです。主は約束どおりに彼らのもとに男の子イサクを与えられました。神様はどんなことでもできるお方でした。

また、モーセやイスラエルの民もそうでした。エジプトの地から逃れた彼らを追って、当時最強の軍隊を率いたパロの軍勢が迫っていた時に、民は恐れ、戸惑い、主に叫んでいました。一体私たちに何ということをしてくれたのですか、エジプトで仕える方が荒野で死ぬよりもよかったですと。しかし、主はモーセを用いてそんな愚かで頑なな民を導き、二つに割れた海を渡らせた後、追って来た軍勢のすべてをその場で滅ぼされたのです。人の目には絶体絶命のように思える状況であろうと、神様にとっては不可能なことなど一つとしてありませんでした。神様はどんなことでもできるお方でした。そのことを目の当たりにしたモーセと民もこんなことばを口にしていました。出エジプト15：11に「【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方がいるのでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができますでしょうか。」と。

また、アブラハムやモーセだけでなく、何より私たちの愛する救い主イエス・キリストの誕生もそうでした。処女マリアのところに御使いが現れて、「あなたに男の子が産まれます」と告げた時、彼女は驚いて口にしていました。「どうしてそのようなことになり得ましょう、私はまだ男の人を知りませんのに」と。人間的に考えれば、確かにそれは到底理解できるような話ではありませんでした。

しかし、それに対しても、御使いはルカ 1 : 37 で「神にとって不可能なことは一つもありません。」と答えるのです。この後どうなったかはもう言うまでもありませんよね？この救い主は完全な人として、完全な神として約束されていたとおりに地上に誕生されました。またそれだけでなく、この方は十字架の上で罪の贖いを成し遂げた後、3 日後に死からよみがえり、すべてに勝利した者として天に凱旋されて行ったのです。神様に不可能なことなど、一つとしてありませんでした。

神様はどんなことでもできるお方なのです。パウロはこの全能なる神様の力をよく知っていました。だからこそ、この方を覚える時に大胆に言うことができたのです。神はあなたがたをあらゆる恵みであふれんばかりにすることができる。これは単なる願望ではありませんでした。かなうかどうかかわからない淡い期待でもありませんでした。偉大な力を持った神様は、必ずそれを成し遂げることができるという揺るがぬ確信だったのです。この方はあなたがたを恵みであふれんばかりにすることができる、だから心配する必要などないと。すばらしい真理です。

●二つの目的 8 節

パウロはここで、神様が単にあふれんばかりの恵みを与えることができるとは言っていませんでした。注目してほしいのは、神様が与えることには確固たる目的があったということです。そのことが 8 節の残りの部分で「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」と、述べられています。二つのことが書かれていました。

①「常にすべてのことに満ち足りて」

一つ目の目的は、「常にすべてのことに満ち足りて」でした。ここで「満ち足りて」と訳されていることばは、ある人が心から満足している状態、足りないところがいっさいなく、十分に満たされている様子を表現するものでした。心から満足している状態のことを言うのです。パウロもこのことばを用いて、自分自身の状態をピリピ人への手紙の中でこのように表現していました。ピリピ 4 : 11 に「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」とあります。ここで同じことばが使われているのです。パウロの心もいつも満足を覚えていました。それは貧しさの中であろうと、豊かさの中であろうと変わることはありませんでした。もっと言えば、このピリピのことばを発した時、彼はローマの獄中にいたのです。正に彼の身は死と常に隣り合わせの状態にありました。次の瞬間には首がはねられてもおかしくない状態にあったのです。しかし、その中であってなお、彼は自分を強くしてくださる方によって、神様にあって変わらず満ち足りることができていたのです。そしてパウロはここでも同じことばを使って、神様はあふれんばかりの恵みを与え、常にすべてのことに満ち足らせてくださると述べるのです。信仰者はすべてのことが可能な神様にあって、必要を十分に満たされ、どんな時も満足を覚えることができると。乏しいことはないのだと。これはすばらしい約束だと思いませんか？

②「すべての良いわざにあふれる者となるためです」

そこで終わってはいませんでした。その後、二つ目の目的が続けて「すべての良いわざにあふれる者とするため」ですと記されていました。ここでの「良いわざ」というのは何のことでしょうか？もちろん、これは私たちが神様のためになすいろいろな働きのことを指すことはできます。でも、文脈を踏まえるなら、これは特に豊かに惜しみなく与えるということです。ということは、大切なことなので、少し整理して考えてみてください。パウロはまず、神様があふれんばかりの恵みを信仰者に与えることができるお方だと言いました。そしてその目的は、その者を常にすべてのことで満ち足らせ、惜しみなく与えることにおいてあふれる者とするためだったのです。言い換えれば、神様があふれんばかりの恵みを与えるのは、その人が豊かになって終わりではなく、その人が豊かに与える人となるためだったということです。神様はその人だけがたくさんの富や持ち物で祝われて満足するためでは

なく、その祝福をほかの人と惜しみなく分け与えるためにあらゆる恵みを十分に与えることができるお方だということです。だからこそ、喜んで惜しみなく分け与える時に、それに必要な物をほかのだれでもない神様が恵みによって備えてくださるということです。だから、乏しいことはない。私たちが喜んで与える時に私たちが困ることはない。不可能なことなどいっさいない。喜んで与える者に、神様はあふれんばかりの恵みを与えることができるとパウロは言うのです。

そして、この考えを裏付けるために、パウロは続く 9 - 10 節で二つの旧約のみことばを用いて説明を加えていました。これから私たちは 9 - 10 節を見るのですが、ある意味、これはこれまでに 6 節から見てきたことの繰り返しと言っても過言ではないかもしれません。9 節には詩篇 112 : 9 のことばが引用されていました。そこには「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりです。」とありました。一体ここで何が言われていたのでしょうか？この内容を理解する上で、もととなる詩篇の背景に簡潔に触れるなら、詩篇 112 篇では「幸いな人の姿」について描かれていました。詩篇の著者はそこで、幸いな人というのは主を恐れて、その仰せを喜ぶ人なのだと教え、同時に与えることにおいて情け深く憐み深い人なのだと書いていました。パウロはそんな詩篇の一節をこの 9 節で引用していました。そして豊かに与える人が旧約の時から変わることなく、神様の前にいかに幸いな存在なのかを教えようとするのです。貧しい人々に惜しみなく与えるという正しい行いは、神様の前に価値あるものとして、いつまでも永遠にとどまり続け、覚えられ続けると。神様はその義を今もまた後も、地上だけでなく天においても決して忘れず、必ずその者に報いてくださる。惜しみなく犠牲的にささげるということは、神様に喜ばれることであるからこそ、豊かに蒔く者は豊かな祝福を刈り取ることを期待できる。どこかで聞きましたよね？豊かに蒔く者というのは、それほど幸いな人なのだというのです。

でもこれを聞いて、豊かに蒔くことが幸いなことなのは感謝なことだけれども、素晴らしいことだけれども、それに必要な種はどうするのですかと思う人もいるでしょう。だから、加えて 10 節でこう続けているのです。10 節「蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。」と。これはイザヤ 55 : 10 からの引用でした。パウロがここで言わんとしたことは非常に明白なことでした。パウロは心配なくいい、蒔く人に種を備えてくださる方は、あなたがたにも十分に蒔く種を与えて、それをふやし、義の実を大いに実らせてくださると。10 節には、私たちが覚えておかなければいけない大切なことが述べられています。それは私たちに種を与えてくださるのも、その実をふやしてくださるのも、その実を増し加えてくださるのも神様だということです。ほかのだれでもない神様がすべての源だということです。このお方が私たちに必要な種を十分に備えてくださり、実を豊かに実らせて祝福を与えてくださるのです。そのことがこの方にはできるのです。

同時に、神様が私たちに種を与えてくださるのは、何も私たちがその種を自分たちのうちで大切に取っておくためではありませんでした。だから 10 節をよく見ると、「蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え」と書いています。「蒔く種」と書いてありました。ですからすべての源である神様は、惜しみなく蒔く者の種を常に十分に満たしてくださるのです。種を与えられて、私たちがそれを持っておくためではありません、それを蒔くために十分に備えてくださるのです。そして、そうすることを通して、その者がますます惜しみなく、豊かに種を蒔くことができるようにというのが目的でした。それが不可能なことなどいっさいない神様のご計画でした。神様はそうやって豊かに蒔く者が決して蒔く物に困ることがないように、必要を十分に備えてくださるのです。

だとすれば、私たちひとりひとりが考えなければいけないのは、どのようにしてこの神様、また人のために与えようとしているかです。神様から与えられているものをどのように私たちが蒔いている

かです。果たして私たちは喜んで惜しみなく与える者でしょうか？確実に言えるのは、もし私たちがお金や持ち物を自分のものであると考えているなら、惜しみなく与えることに難しさを感じてしまうことがあるということです。もしすべてが自分の所有物だと考えていれば、自分の手から失われていくことに不安や恐れを抱いてしまうことがあります。私たちが覚えなければいけないのは、私たちに与えられているものはそもそもすべてが神様の所有物なのということです。神様がすべてのものを造られました。私たちの財布に入っているお金も、私たちが銀行に蓄えている財産も、家や車もありとあらゆる持ち物も全部が神様のものなのです。いやいやそれは違いますよ、それらは私が働いて手にしましたから私のものですと、ある人は言うかもしれません。もしそのように言う人があるのであれば、よく考えてみることです。一体だれが働くために必要な体を私たちに備えてくださっているのかということです。一体だれが私たちにに対して仕事を与えてくださっているのかということです。もちろんそれもすべて神様です。私たちが持てる才能や学歴も、家族や友人といった人間関係も、私たちの健康も同じです。すべてのものが神様から恵みによって与えられているのであって、私たちは単に神様から与えられているものを管理している者にすぎないのです。だからこそ、この真理を理解すれば理解するほど、私たちにとってふさわしい態度は、「私のお金をどうしようか」、「私の持ち物で何をしようか」ではなく、「神様のお金で、神様は私に何をしてほしいだろうか」となるのです。

この点に関して、ドナルド・ホイットニーという先生も自身の著書でこのように述べていました。「ハガイ2章8節で、主は『銀はわたしのもの。金もわたしのもの。一万軍の主の御告げ—』と述べられていました。つまり、これは『私のお金をどれだけ神に捧げればいいのか』ではなく、『神のお金をひとまず、どれだけ自分の手元に残しておこうか』という問題なのです。」と。私たちは神様から恵みによって与えられているものの管理者です。神様は私たち自身が豊かになって、ますます快適な暮らしをするためにではなく、私たちがますます惜しみなく与える者となるために必要なものをすべて満たしてくださるのです。喜んで心から惜しみなくささげる者は乏しくなることがない、その必要は必ず満たしてくださる、それこそが全能な神様の約束でした。神様はあらゆる恵みで私たちをあふれんばかりにすることができると言われたのです。だとすれば、この真理は喜んで与える人へと成長したいという、そんな私たちの思いを力づけるものにはならないでしょうか？喜んで与える人は、神様の恵みに確信を置くことができる、これが成長を目指す私たちが覚えるべき三つ目の動機でした。

4. 喜んで与える人は神様への感謝を生み出す 11-12節

続けて四つ目の動機として教えられていたのは、喜んで与える人は神様への感謝を生み出すということです。そのことが11-12節に記されてきました。「:11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。:12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。」、ここでパウロが言わんとしたことは非常にシンプルでした。それは神様によって豊かにされた人々が惜しみなく与える時、与える人自身を豊かにするだけでなく、ほかの人々をも豊かにするということです。もっと言えば、与えることというのは自分だけでなく、ほかの人々にも益をもたらし、そしてその者たちが神様に感謝をささげるようになる機会を生み出すと言うのです。ささげること、与えること、それはますます神様の栄光をたたえるようにと、周りの者を促す働きになるのです。だからこそ、兄弟姉妹の必要を満たそうと惜しみなくささげること、献金というものは、教会にあってひとりひとりがなすべき大切な一つの奉仕の働きでした。

▶奉仕のわざ

そしてそのことをよく分かっていたパウロは、12節の初めで献金対して「この奉仕のわざ」という言い回しを用いているのです。この「奉仕のわざ」ということばは興味深いもので、大きく二つの

ギリシャ語から成り立っています。まず「奉仕」と訳されていることばですけれども、これはもともと民に代わって神殿や幕屋でいけにえをささげていた祭司の務めを表わすのに使われることばでした。これと同じことばをパウロはピリピ2：17でも用いていました。そこでは「たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。」と表現されていました。この箇所では同じことばが「供え物」と訳されていました。つまり、パウロがここで献金を奉仕と表した時、彼にとって献金という行為は神様の前にささげられる霊のいけにえだととらえていたというのです。また、それに加えて、「わざ」と訳されていることばがありますが、このもとのことばには“ディアコニア”というギリシャ語が使われています。このことばは、以前、教会の霊的リーダーについて学んだ時に出てきた「執事」の語源となるものでした。執事というのは、教会で人々に仕える大切な働きを担っている者たちのことでした。そしてパウロはこれと同じことばで献金と表すのです。言い換えれば、教会において献金というのはほかの働きと何ら変わることもない重要なものだということです。惜しみなく与えるということは、みことばを教えることや祈ることであったり、仕えることであったり、その他さまざまな奉仕と同じように大切な働きでした。パウロはそんな二つのことばをまとめて、ここで「奉仕のわざ」と言うのです。パウロはエルサレムの教会に対する献金は、まるで祭司が尊いいけにえを祭壇にささげるのと同じように、神様の前にささげられる霊のいけにえ、神様に喜ばれる大切な働きなのだということを言わんとしたのです。献金というのは、それほど重要なものでした。この「奉仕のわざ」というのは、エルサレムの聖徒たちの抱えている必要を十分に満たすことができるすばらしい働きとなるものでした。だからこそ、パウロはコリントの人々に対して喜んでささげようと励ましていたのです。

でもそれがすべてではありませんでした。パウロはコリントの人々のささげ物がエルサレムの教会の聖徒たちの必要を十分に満たし、はい、それで終わりとは述べていませんでした。彼は12節で「この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。」と言っていたのです。つまり惜しみなく与えるその献金は、人々を満足させて終わりではなく、神様に対する多くの感謝にあふれんばかりにするようになるというのです。

ここで少し献金を受け取る側のエルサレムの教会の立場に立って考えてみてください。彼らは、パウロによって届けられた物によって、自分たちの必要が満たされることを大いに喜ぶことができました。もちろん、彼らは自分たちのもとの献金を届けてくれたパウロに感謝することもできましたし、自分たちに豊かな献金を送ってくれたいろいろな教会に感謝することもできました。でもそれ以上に、彼らがその献金を手にする時、ある事実気づくことができるのです。それはほかのだれでもない、神様があらゆる手段を通して、自分たちの必要を満たしてくださったということです。すべての源であり、あふれんばかりの恵みで満たすことができると言われた、その神様が自分たちを忘れずかえりみて必要を備えてくださったのだということを見て、心から神様に感謝することができるのです。確かに神様は自分たちを見捨てることなく、いつもともにいて助けを与えてくださったのだと改めて確信を抱き、神様に栄光を帰すことができるのです。ですから、こうして喜んで与えるということ、惜しみなく与えるということは、自分だけでなく、それを受け取る人々のうちに神様への感謝を生み出す、そんな働きができるものだったのです。だからこそ、私たちひとりひとりにとって、ささげるとは重要な働きになるのです。

考えてみれば、コリントの人たちはエルサレムの兄弟たちに対して献金をしないためにさまざまな口実を持ち出すことも当然できました。彼らはこんなふうと言えたのです。「私たちはエルサレムの兄弟姉妹には一度も会ったことがないから、そんな彼らのことなんて私たちは知りません」、「彼らが危機に遭って苦しんでいるのも、別に私たちのせいではないし、私たちだって自分たちのことで手いっぱいです」、こうやって、いろいろな言い訳をすることができました。でもそんな彼らに対し

て、パウロは告げるのです。兄弟たち、確かにあなたがたは彼らに会ったことはないかもしれない。でも、神様は豊かに惜しみなく与える者をあふれんばかりの恵みで満たしてくださることができるお方だ。そして何よりあなたがたが喜んでささげる時、それはあなたがただけでなく、エルサレムの兄弟姉妹の心に神様に対する大きな喜びをもたらすことができる。そんな働きを担うことができるのだ、すばらしい働きの一端を担うことができるのだ。だから喜んで与えることを考えなさいと。

これは、私たちにとっても覚えるべき大切な真理です。私たちの神様は、私たちがますます惜しみなく与える者となるために、必要なものをすべてあふれんばかり満たしてくださるお方でした。でも同時に、そんな豊かにされた私たちが喜んで惜しみなく与えるなら、ほかの人のうちにも神様に対する感謝を生み出すことができるのです。私たちはささげることを通して、自分自身だけでなく、ほかの者と一緒になって神様を見上げ、ほめたたえることができると言うのです。だとすれば、神様から与えられたその恵みをどのように用いるのかということは、非常に大切なことだということです。私たちは神様がほめたたえられるために、喜んで惜しみなくささげようとしているのでしょうか？それとも、神様から与えられたその恵みを自分自身だけが楽しんで、自分自身のうちにだけとどめて、だれにも分かち合おうとしていないのでしょうか？

ウォーレン・ウィズリーという先生もこんなことを口にしていました。「キリスト者が献金をしないための口実を考え始めると、その者は自動的に恵みを与える領域から外れてしまうのです。恵みは理由を探し求めることをしません。恵みはただ機会を探し求めます。もしそこに必要があるなら、恵みに支配されたキリスト者は、その必要を満たすために自分にできることをするのです。」と。このことばはそれぞれがよく考えなければいけないことです。果たして私たちは恵みを喜んで分け与え、神様への感謝をますます多くの人と分かち合う機会を探すことに一生懸命になっているのでしょうか？それとも与えることのできない理由を一生懸命に探しているのでしょうか？私たちの歩みは、果たして喜んで与える人としての歩みでしょうか？確かに私たちの心は、いろいろなものによって恐れや不安を覚えることがあります。先が見えなければ、種を豊かに蒔くことをためらう思いが生まれることもあるでしょう。だからこそ、私たちはきょう見たことを覚えることです。すべての源である神様は、惜しみなく蒔く者の種を常に十分にあふれさせることができるお方でした。不可能なことなどいっさいない、私たちの神様は喜んで与える者の必要を必ず満たしてくださると約束してくださったのです。

そして何より、この方は私たちを豊かにしてくださるだけでなく、ご自身の恵みをほかの人々へと与えるために私たちをも用いてくださるのです。そして私たちが用いられて喜んで惜しみなく与えれば、その結果、神様のすばらしい恵みを多くの人も知り、それを分かち合い、神様を見上げ、神様に感謝することができるようになる。こんなすばらしい働きを私たちも担うことができるということです。だとすれば、私たちが喜んで与えるということは、とても大切なことです。この真理を覚える時に、果たして喜んで与える人へとますます成長したいという思いを強められないのでしょうか？神様の働きを担うことができる、喜んで与える人は神様への感謝を生み出す、これが成長を目指す私たちが覚えるべき四つ目の動機でした。

○まとめ

さて、私たちは、この朝、喜んで与える人へと成長していくために覚えるべき大切な六つの動機のうち三つ目と四つ目を見てきました。三つ目は、喜んで与える人は神様の恵みに確信を置くことができるということであり、四つ目は、喜んで与える人は神様への感謝を生み出すということでした。

●ハドソン・テイラーの喜び

最後に、改めて初めに見たハドソン・テイラーの姿を見てみましょう。自分自身も銀貨1枚を除いて何も持っていなかった彼は、それを男に与えることで悩み、葛藤していました。しかし、そんな彼

の心が変わられるのです。続きにこう記されていました。「あわれなハドソン。彼はいったいどうすればよいのだ。その時、突然、読み慣れた山上の説教の一節が思い出された。『求めてくる者には与えよ。』『与えよ！』ゆっくり、ハドソンは手をポケットに差し入れた。一枚きりの銀貨、彼の全財産が出ていくのだ。『あなたは、私のことを金持ちだと思われるかもしれませんが…』ハドソンは銀貨を男に手渡しながら言った。『実際のところ、これが私の持っている全財産なのです。』驚いたことに、ハドソンはそう言いながら、自分の気分が明るくなっていくのに気付いた。…そして、ハドソンは非常な確信を持って、神に頼るべきことを男に説いているのであった。話しながら一方で、ハドソンは自分の感情がすっかり変えられていることにびっくりしていた。彼も、そして、この家族も、共に喜びを分かっているということで心は浮き立っていた。夜風に髪をなびかせ、コートの手をひるがえし、大声で歌いながら行くハドソンには、この世の煩いなど少しもなかった。」と。

ハドソン・テイラーも最初、惜しみなく与えることに難しさを覚えました。しかし、そんな彼も必要を必ず満たしてくださる主に信頼したからこそ、喜んでささげることができたのです。彼の満足の源はほかのだれでもない神様でした。私たちもこんな者として歩んで行きたいですね？どんな時も神様の恵みに確信を置いて、神様への感謝を自分だけでなく、ほかの人にも分け与える者として、今週も主を見上げ、ともに成長していきましょう。